

ロマン派の光芒

要 旨

ノヴァーリスはドイツロマン派の極星である。彼は十八世紀後半に生まれ、騒乱の時代に育ち、成人しては世俗的な仕事の傍ら創作活動に励み、十九世紀の初年に、その短い生涯を終えた。生存時はほとんど巷間に知られる存在ではなかったが、死後次第に評価され、やがて「青い花」の詩人として蘇生し、今やドイツロマン派を代表する鬼才として名を竹帛に垂れている。ノヴァーリスの作品は今日では断簡零墨に至るまで、全集もしくは選集として公刊されている。しかるに、その邦訳は極めて少ない。概して彼の作品は、大衆一般向きではないから、今後もごく一部の人々にしか読まれないだろう。惜しむべき傾向である。筆者はドイツ遊学中に偶々彼の作品を目にして、その奇才に驚嘆し、瞠目した。爾来折に触れてその作品集を繙いているが、未だに詩人の全体像を把握するに至らない。ノヴァーリスとは、一体如何なる精神の持ち主だったのか。彼の作品並びに彼に関する資料から、その人間像を考察するのが、本文を草する筆者の眼目である。

(一) エートス

ノヴァーリスの本名は、フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク。

*堤 博 美

一七七二年五月二日に中部ドイツに生まれ、一八〇一年三月二十五日に満二十八歳、数え年三十歳で死去した。ヘーゲル、ヘルダーリン、ベートーヴェンが二歳年長、ナポレオンが三歳年上であるが、いずれも彼の同世代である。ちなみに生年の一七七二年は、ロシア、オーストリア、ロシアによる第一次ポーランド分割が行われ、日本では安永元年、田沼意次が老中となった年である。ノヴァーリスが十七歳の時にフランス革命が起こり、二十一歳の時にフランス国王と王妃マリー・アントワネットが断頭台で斬首された。その余波は瞬く間に全ヨーロッパに及び、騒乱があちこちに統発した。不穏な空気がドイツ諸邦にも広がった。ナポレオンの台頭がそれに拍車を掛け、やがてドイツ全域が戦乱に巻き込まれて行く。かように激動、擾乱の時代にノヴァーリスは生まれ、育ち、成人になった。彼の人と為りを充分に理解するには、その生きた時代背景をも考慮する必要がある。

さて、一七九四年十二月六日に、ノヴァーリスの愛弟エラスムスが兄に長文の書信を出している。その末尾に次のような文面がある。

兄さんがゾフィー（ノヴァーリスの恋人）の腕の中で、この人生の迷路に出没する三つの怪物、即ちヒポコンデリー、不機嫌、倦怠を抹殺されることを切に願います。

この文言を読んだ時、筆者には豁然として感応するものがあつた。人生の迷路における怪物とは、若干二十の青年がよくぞ看破したものである。その慧眼に驚く。ヒポコンデリー（心気症）、不機嫌、倦怠は確かに人の心の闇に巣くう妖怪である。これに多少とも苦しまないような青年は少なからうが、しかしこれだけはつきりと道破しえたのは並ではない。この非凡な認識をなした背景には、ノヴァーリスの兄弟姉妹達（十一人）の育つた家庭環境の強い影響があつたことを見落としてはなるまい。それをここで詳細に記述する違はないが、ともかくそれは当時としても極めて特異な、或いは異常な環境であつたことは間違いない。一切の世間的交際とは隔絶し、朝夕自ら幼い子供達に宗教教育と倫理教育を実践する狂信的なまでに敬虔で、道徳的に厳格な父親の主宰する家庭がどんなものであるか、凡そ想像がつくだろう。母親はその逆に謙虚で、愛情深く、忍耐強い女性だったが、その厳格な夫に従順に仕え、生涯逆らうことはなかつた。優しい母と厳しい父。そうした父母の下で、まるで人里離れた修道院のような暗い大きな家（実際ノヴァーリスの家は昔修道院だった）の中で、遊ぶのも兄弟たちだけというような、陰気で、寂しい、厳しい躰の教育を幼少時に受けたのである。そうした孤絶した環境に育つた兄弟が、その胸中に潜伏する妖怪を夙に自覚していたとしても不思議はない。不機嫌と倦怠はさておき、ヒポコンデリーはともかく精神的な病気の一つである。これに苦しむ人間の素質の中に何が潜在しているのか。それを探る上で、次のゲーテの観察は示唆に富む。

ゲーテは、ちょっとした過失にも心が穏やかでいられない、ある少年（彼の孫）の事を話した。彼はこう言った。「そのことに気づいた時は愉快ではなかつたね。というのは、それは余りに過敏な良心を持つている証拠なのだ。自分の道徳心を過大に評価する余りに、自分のどんな過ちでも許せないのだよ。そんな良心の持

ち主は、何か大きな活動をして心のバランスをとらないと、ヒポコンデリスト（心気症病み）になる」（エッカーマン『ゲーテとの対話』一八三一年五月二十九日、筆者の原典からの訳出。以下同様）

過敏な良心とヒポコンデリーとの相関関係が見事に洞察されている。ここからノヴァーリスはその内面に過敏な良心を秘めていたと推断しても、あなたがち牽強ではあるまい。精神分析家の見解では、良心は両親の教育に由来する後天的産物だとされるが、ノヴァーリス自身が、代表作『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』の中でそれを熱心に論じている。彼が良心に無関心でいられたかつた証拠である。そこには都合十二度も良心なる言葉が使われているが、その表現は微妙である。

太古のすさまじい自然の残響も聞こえるが、さらに気高い自然の響き、すなわち我らの内部の天上的な良心の呼ぶ声もする。死すべきものが土中に響動めいていけるけれど、不死なるものが明るく輝き始めて、それ自身を認識する。

良心、すなわち感覚と多様な世界を思い描く力、全人格の萌芽。

良心は、人間めいめいが生まれながらにして持つ天上の仲介者である。

「我らの内なる天上の声」なる表現は、イマヌエル・カントの所謂『人間内部の神の代理人』を想起させる。しかしノヴァーリスの方が、良心をより柔軟に、より情緒的に、より気高く把握している。それは、恐らく詩的表現と哲学的表現との差にもよるが、多分に詩人の人格の高貴さにも由来しよう。それに何より、彼の中に天上的な敏感な良心が絶えず活発に働いていた。今日では、高貴な人格とか過敏な良心

とかは、もはや死語か、せいぜい皮肉な揶揄にしか聞こえないが、それは、人間が精神的に進化したからではなく、むしろ道德的に退化しているからである。そしてもしこのまま退化するにまかせておけば、人格は失われ、人は生きる亡霊、あるいは我欲の亡者と化して、人類を滅亡に導くであろう。さればこそ人格の偉大さや高貴さが重視されねばならないのである。ここで、ことさら道学者ぶるつもりはないが、人格の陶冶は、決して気休めのお題目ではないし、また偉大さや高貴さも、単なる飾り文句でもない。それをゲーテは夙に喝破している。

もとより芸術や詩文においては、人格がすべてである。ただ近頃の批評家や美術評論家の中には、この事を認めようとせず、詩や芸術作品の創造に果たす人格の偉大さを、何か些細な付け足しにしか見ない、ひ弱な連中がいる。だが、勿論偉大な人格を看取し、それを尊敬するためには、人は自らまた一廉の人物でなければならぬ。(エッカーマン『ゲーテとの対話』一八三一年二月一三日)

人格は主として、思想、感情(良心を含む)、意志の三つからなるが、ノヴァーリスが、その人格において意識的に追求したものは何だったのか。

いつの時代にも人の探し求めし唯一のもの、
何処にまれ、あるは世の高みに、あるは深淵に、
数多の異なる名もて、徒に、常に隠れたりし、
常に胸に感ぜしが、さりとて確とは捕らえ得ず。
昔、男ありて、童らに懐かしき神話もて、
隠れたる城への道、はたまたその鍵をば明らめぬ。
かの謎解きの易き暗号をば解きしもの稀なりしが、
されど、目標を見極めし巨匠はありき。

久しき時は流れ去り、迷誤我らが意を研ぎ澄まし、
神話は我らに最早真理をば隠さざりき。

幸いなるかな、賢者にて世を思い煩わず、
自らに、とわの知恵の石を望みし者。

ただ理性の人のみ奥義の匠にて、

その者は一切を命と黄金に変え、秘薬をばはやませず。

彼の内なる聖きフラスコに蒸気沸き、王は彼の中にあり、

デルフォスもまた、そをついに捕らえぬ、曰く、汝自身を知れ。

ノヴァーリスはこの詩を、フライベルクの鉱山大学で鉱物学を研究していた一七九八年五月十一日に書いた。ここに若き日の彼の志向が如実に表明されている。この人生の秘密が、実は自己認識にあることは、ソクラテス以来周知のことである。だが、真の自己認識に達した者は、古来稀である。一見容易なことが、実は至難であること、世の賢者の熟知するところであろう。ところで、この箴言をノヴァーリスが何時銘記したかは不明だが、少なくとも十九歳の頃には承知していたらしい。一七九一年十月五日付けの書簡に、彼はこう認めている。

これから三週間後にライプチヒに出発し、そこで、これまでとは異なる生活規律に則った生活を始めるつもりです。この冬学期、一所懸命、最も厳しく私が専念すべき学問は、法学、数学、哲学の三つです。自分自身にもっと強さと確かさ、もっと計画と目標を獲得すべく努めねばなりません。これらは如上の三つの学問を厳密に実行することで、容易に達成されるでしょう。美的な学問を目標として精神的な断食をすること、その目的に悖ることは全て良心的に節制すること、それが私の最も厳しい規律となったのです。汝自身を知れが、私の座右銘であり、隠れて生きよが、私の実生活のモットーです。

十九歳の若者の所信だけに性急な自省と期待が見られるが、それでも本人は真剣で真摯であった。その後の彼の猛烈な勉学精進が、その心意気の激しさを証して余りある。法学、数学、哲学のみならず、歴史、政治、宗教、あまつさえ化学、医学、薬理学、物理学、地質学、鉱物学をも研究した。まさに百科全書的な猛勉強である。就中、哲学、宗教、文学に対する傾倒は、死ぬまで持続した。この勉強精進の背後には、自己認識の衝動と自己形成の欲求が絶えず伏在していた。ノヴァーリスの代表作『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』第二部にも、スフィンクスとファールベルとの間で、次のような問答が交わされる。

「稲妻よりも唐突に襲ってくるのは何？」

「復讐」

「この世で最もはかないものは何？」

「不正な善財」

「世界を認識しているのは誰？」

「自分自身を認識している人」

「永遠の秘密とは何？」

「それは愛」

「愛はでは誰のところにある？」

「ソフィーのもとに」

このような簡潔で象徴的な会話にも、ノヴァーリスの不断の思索と探求の成果が反映している。ノヴァーリスにとっては、自己は漫然として存在するものではなく、たゆまぬ努力精進によって、自ら造形すべき芸術作品であった。彼の人格の発露である思想も感情も意志も、崇高で、純粹で、強靱である。彼は脆弱なロマンティストでもなければ、

ば、非実践的な夢想家でもない。むしろ空想的思索を巧みな言語表現に移し変えながら、日常の実務にも精励する模範的な実践家であった。事実、彼は大学卒業後、ザクセン選帝公国の国立製塩工場の官吏となり、その責務を立派に果たしている。一七九八年十二月五日に、上司宛にこう表明している。

私の執筆活動は余技の一つです。あなたは私の本務、つまり実生活から正当に評価して頂きたいのです。私が善良で、有用で、活動的で、愛情深く、誠実であれば、私が余暇に無益で、卓越してもない、生硬な文章を書くことなどは大目に見てください。無名の人間の著述など無害でしょう。何故なら、そんなものはほとんど読まれることもありませんし、たとえ読まれてもすぐに忘れ去られてしまいます。私は文筆活動を自己修行の手段とみなしています。綿密に何かを考え抜き、それを作品に仕上げることを学ぶ。それが私の望みのすべてです。ある賢明な友人から何か称讃の言葉をおまけにでも貰えば、望外の喜びです。自己形成を完遂するには、人間は幾つかの階梯を乗り越えていかなければならないと思います。人はある時期、家庭教師、大学教授、手職人、そして作家にもなるべきです。下僕（召し使い）の職もまた悪くありません。

ここにノヴァーリスの率直な心情が如実に表明されている。ノヴァーリスはその短い生涯に、哲学者、自然研究者、詩人、作家、官吏の道を開歴した。一人の文学者でこれほど多彩な活動を実践した人間は極めて稀である。筆者の知る限りでは、彼に匹敵する多面性を持った文学者は、ゲーテ、シラー、E・J・V・ホフマンくらいであろう。こうした多面的な活動の根底には、彼らの人格における自己形成の強い欲求が働いている。ノヴァーリスの場合にはそれが顕著である。十二歳でギリシア語とラテン語を習得し、古典文学に精通しただけでなく、同時代のあらゆる分野の学問にも親しんだ。その向学心の強さと忍耐

力の大きさは並大抵ではない。彼があのような短命にもかかわらず、あれだけ多面的に才能を発揮し得たのも、その強靱な意志と忍耐の賜物である。ややもすれば、早熟夭折の天才の代表のごとくみなされがちだが、ノヴァーリスも実は一步一步、ゆつくりと着実に歩み、成長したのである。彼自身もそれをよく自覚していた。友人のシュレーゲル弟に、ある時、こう告白している。「僕は何事も性急にやろうとは思わない。自分を完成させる事を学ぶには、一つの事をじっくりと時間をかけて仕上げねばならない」

ノヴァーリスにも当然ながら、長く辛い修行時代があった。それを不撓の忍耐力と勇猛心で切り抜けた。その結果、彼はようやく詩人として成熟し、独自の境地の創作を開拓する時が到来したことを自覚する。『夜の賛歌』、『宗教歌集』、『花粉』、『信仰と愛』、『ザイスの学徒』、『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』、『その他膨大な『断想集』が、その成果である。美しい青い花がようやく大輪の華を咲かせようとした、まさにその時に、彼は病に倒れ、不帰の客となった。せめて余命半年もあれば、ロマン派の代表作は完成されたことであろう。惜しみて余りある詩人であった。

ノヴァーリスの人格が高潔であったことは疑いないが、しかしそこにもまた暗い深淵があり、矛盾と撞着が渦巻いていた。これについては後にも触れるが、例えば荒々しい情熱、過剰な自意識、軽薄な自己感情、有為の巧名心、半端な自己批判、仮初の絶望、底の浅い悲観主義。先にも引用したが、ノヴァーリスの弟エラスムスの指摘した通りに、自分の気まぐれと移り気を持って余した揚げ句、倦怠、不機嫌、ヒポコンデリーに苦しむことも稀ではなかった。そうした眠れぬ夜々、自殺を考えることもあった。自分の心の中に天使と悪魔が同居しており、それがすさまじい戦いを繰り返していることを見守るしかない。彼は、人の心が戦場であることを自覚した。されば、自己とは何か、心とは

何かを問うことに、あれほど執着したのである。そして実際病臥の夜に、霊的世界の門が夢を通じて開くことも体験したのである。彼の難解な断想集は、そうした体験なくしては生まれえなかつたであろう。自己を知るとは、自己を見ることであり、自己を見るときは、己の魂を見ることにほかならない。己の魂には悪魔が巣くっている。これを調伏しなければ、救いはない。だから先ず、自己を救え、自己を克服せよ。それが彼の定言的命法となつたのである。

(二) エーロス

天才は欲求と衝動に顕現する。そしてあらゆる人間の拳惜言動の根源には官能的な快楽が潜在する。精神分析学の理論を援用せずとも、すでにノヴァーリスがこのことを熟知していた。されば、この観点から彼のエーロスの側面を、以下に検討する。ノヴァーリスが十八歳の時に書いた詩に、「我が未来の妻の性格 (Charakter meiner künftigen Frau)」と題するものがある。いささか長いが、左にそれを訳出する。

いつの日か我が生涯を

捕らえるべき乙女、

その乙女は物分かり良く、

我を楽しめます機知に富みしならん。

かてて心根の優しく、

慈悲深く、貞淑にて、

明るく、快活なれかし、さながら

五月の朝の如くに。

常に自然と優美の女神の
み教えの如くに着飾り、
加えてただ奇抜なる流行のみを
あがめる人形の如き娘でなれかし。

さらにそのおみなど美しくあれ、
そは常に人の長所なるゆえ、
また子供らを氣遣い、
家庭をも恣せにせざるべし。

裕福なるもまた障りならず、そは常に
喜ばしきものにて、憂えなし、
滋養ある料理を伴う
程よき食事に恵まれん。

されど世にも稀なるは
かかる乙女なるべし、
なれど見よ、我が幸福、そは遠からず、
妻として、そも我が描きしは

かのラウラ独りのみ、そは我に愛しまれ、
かの小さき町に住まい、
喜ばしき我が愛に報いる乙女、
そこもとの樹木よ、汝らも知るが如く。

この詩は、中世イタリアの詩人ペトラルカ（一三〇四―一三七四）の叙情詩に歌われた永遠の恋人ラウラを想定して書かれたものであろう。

しかしここにはノヴァーリス自身の密かな愛の憧れが表明されているように思う。夢想的な十代の若者にとって、未来の花嫁の理想像を思い描くことほど、甘美な空想はないであろう。それは人間の根源的衝動の発露だからである。このエーロスは生まれながらにして存在し、乳幼児の頃はほとんど無意識の揺籃に眠っているが、春機発動期の少年時代に勃然として沸き起こる。それは異性への強い愛情として、あるいはまた同性への友情として発現する。この衝動の強さは人それぞれに千差万別であろうが、この章の冒頭でも述べたように、とりわけ天才や狂人において多彩かつ鮮烈に顕現し、その一生を規定する要因となる。

さて、それではノヴァーリスの場合は如何であつたらうか。彼が友情に厚かつたことは言うまでもないが、ここではその異性愛のみに限定して観察することにしよう。彼の真の初恋が何時だったか、そしてその相手は誰だったかは、はっきり分らない。ただ彼がライブチヒ大学に在籍していた一七九二年（ノヴァーリス二十歳）の末に、ユーリエという名の娘に恋をして破れた事は確かである。何故なら、その顛末を翌年の二月九日の父親宛の書信の中で彼自ら告白しているからである。その一部を左に採録する。

若気の至りと大目に見て、お許し頂きたいのですが、僕は実はある一人の少女に恋をしてしまったのです。最初の頃はそれほどでもなかったのですが、やがてこの愛の炎は急速に燃え上がり、瞬く間に僕の心を占領してしまつたのです。それに抵抗する力はなく、僕は文字通り身も心も捧げました。それにこれは僕の人生の初めての恋だったので。

ここでは初恋だと打ち明けているが、その真意の程は分からない。父親に、これまで勉強だけに打ち込んできたという事を弁明しようとする。

する底意が感じられないでもない。ともあれ、彼はこの恋に真剣で、相手の少女と結婚したいと願った。だが、父親は息子の率直な告白に激怒した。勿論結婚など許すはずもない。その理由は、息子が収入のない学生の身分という事が主だったろうが、また相手の娘が庶民階級の出自だった事も、彼の怒気に触れた。ノヴァーリスの父親は由緒ある貴族の家系の出であり、自らも男爵の称号を持つれっきとした官吏であった。彼は自分の体験からも、息子が身分の低い娘と不釣合な結婚をするのを看過できなかったのである。恋が成就しなかったのも、恐らく父親の猛反対があったからであらう。初恋を断念することが、どれ程辛いことだったか。しかし父親に逆らって、自分の意志を断行する勇氣は、ノヴァーリスにはなかった。当時の上流社会一般のしきたりがそうであつたらうが、特に彼の家庭では、厳格な父親は絶対的な存在だった。家父長の權威は言わば当時の国王のそれに等しく、家族の誰もそれに逆らうことはできなかったのである。ノヴァーリスとて例外ではない。彼は父親に反発を感じたろうが、反抗はできなかった。それだけに失恋の煩悶と苦悩は切実だったに違いない。同じ書信にその間の彼の心中の思いが率直に吐露されているので、それを傾聴しよう。

僕はかつて経験したこともない状態に陥りました。何かある不安がどこでも僕を鞭打ちました。その苦しみの激しさは、とても口には言い表せません。それでも時折冷静になる間がありました。そうした時には義務感や決断の気持ちで沸きだし、また父上のことを考えては、内面の苦痛が却って倍加するのです。それというのも、このままではいけないということはいかからずです。とはいえ、無力感で僕の心は引き千切られる思いでした。愛情と義務が分かちがたく結び付いていて、その二つを結合させたかったです。僕にはそれは不可能でした。二週間というものの、僕はほとんどまともに眠れませんでした。そして僅

かな眠りの間さえ、ひどい夢にうなされて、苦しみました。そこでやっと決意が固まりました。ちょうどその時期に、父上に会つたのです。しかしあなたとの短い出会いが僕の内部状態を一層混乱させました。当時僕は先ず最初に、すべてを伯父さんに書き送りました。その後で僕の心の熱も少し収まりましたが、でも決意は変わりませんでした。僕の情熱はすっかり消えてしまいました。ですから父上はもう僕の情熱の再発を心配なさる必要はありません。その情熱はある度合いまで上昇した後で、ひとりで止揚されました。そんなことは父上には想像できないでしょうけれど、傷痕は残りましたが、やがて時が癒してくるでしょう。それでもそれは永久に僕の人生に忘れ難い時期として残るだろうと思います。

それから数年後の一七九九年の冬にも、上司への書簡の中でノヴァーリスはまたもこの事件に言及している。余程忘れ難い出来事だったのであろう。ただその文章は動詞を過去形で統一し、その口調も感傷を押しさえて、あくまで冷静で客観的である。

私はライブチヒに行きました。そこで魅惑的な社交界に出入りして、以前抱いていた期待や願望が再び頭をもたげるとともに、虚栄心がまたもぶり返してきました。先ずそこで私の心が目覚めて、ある一人の女性—あなたもご存じの現在ベルリン在住のジュールダン夫人のことです—への激しい情熱の果てに、突如私は中庸の道を選び、兵士になる決意をしました。

恋の破綻から兵士になろうと決意したことは、父親にも告げているが、富裕な貴族の子弟からなる騎兵団に入団するには、その支度と維持費に相応の金額が必要なのが判明し、その決意もあえなく画餅に終わった。どこもかしこも金次第、と彼は弟への手紙で嘆息している。それはともかくとして、ここで注目したいのは、失恋したノヴァーリスが兵士になつて従軍したいと願つたことである。これを裏返せば、

それは一種の自殺願望であり、その決意の表明であろう。これに関し
て筆者が想起するのは、かのゲーテの処女小説『若きヴェルター
の悩み』の主人公のことである。幸福が妨げられ、活動が阻止され、願
望が充たされないヴェルターは兵士となり、戦争に出て行きたいと
願う。だがその願ひも叶えられずに、ついにはピストル自殺を遂げる。
かように愛の挫折は、時として多感な青年を死へと迫りやる力を持つ。
エロスとタナトス（愛と死）は表裏一体をなしており、古代以来幾
度となく繰り返されてきた悲喜劇の一つである。ノヴァーリスもまた
それを痛感したのであろう。

さて時は前後するが、一七九四年八月一日付の友人宛の書簡の中で、
ノヴァーリスは次のような告白をする。

君には信じられまい、僕が今どれほど自分自身の觀念に浸って暮らしているか
を。それはまるで花嫁の日々のようだ。いやそれよりもっと自由で拘束がない。
それも自由に選んで決めたことだからね。僕は新婚初夜、結婚生活、子供が待ち
遠しくて堪らない。

こうした期待を胸に抱いていた二十二歳のノヴァーリスは、はしな
くも運命の女神に出くわした。ゾフィー・フォン・キューン。当時ま
だ齡わずか十二歳の少女であった。もとより彼が一目惚れしたのであ
ろうが、少女の方も彼が気に入ったに違いない。明るいプロンドの巻
き毛をした、黒い眼の少女。彼が初めて会った時、白百合を片手に持
ち、頭には白い睡蓮の花の冠をつけていた。彼女の渾名は、その住ん
でいた土地の名前を冠して「グリュニンゲンのバラ」と称讃されたほ
どである。恐らく伝説から抜け出たような美少女だったに違いない。
しかし天は二物を与えずの諺通り、彼女は生来病弱な体質だった。そ
の美しい容姿はともかくとして、彼女は一体どんな性格の持ち主だっ

たのであろうか。その点で、ノヴァーリスが彼女を観察して書き留め
たと見られる断片的な記録が残っている。いささか長い、それを以
下に略引する。

彼女の早熟。彼女は誰からも気に入られることを望む。義父に対する従順さと
恐れ。彼女が大切に思ったり、あるいは恐れたりする人々に対しての優しさ
と慎ましさ。見知らぬ人への丁寧さ。慈善的な行為。子供らしい遊びへの執着。婦人
たちへの敬愛。兄弟姉妹への愛情。読書好き。婦人の仕事への愛着。彼女は詩を
重んじない。あけつびろげ。彼女はまだ本来の反省能力に達していないようだ。
結婚への恐怖。彼女の喫煙癖。子供らしい母親への愛着。幽霊を怖がる。物まね
の才能。苛立ちと敏感さ。教養への関心。擲論と陰口に対する嫌悪。一風変わった
判断に対する注目。観察力。子供達への情愛。秩序を重んずる精神。礼儀作法
への執心と熱意。私がどこでも気に入られるのを彼女は望む。私が余りに早く彼
女の両親の方へ視線を向けたことに気を悪くし、すぐあからさまにそのことを私
に注意した。彼女は物語を聞くのを好む。彼女は私の愛情に傾着しない。私の愛
情がしばしば彼女を圧迫する。彼女は始終冷淡である。彼女は未来の生活を信じ
ないが、魂の輪廻は信じている。彼女は余りに大きな注目を集めるのは好まない
が、軽視されると気を悪くする。蜘蛛と鼠を非常に怖がる。私がいつも楽しそう
にしているのを望む。彼女の傷口を見てはいけない。親称（君とかお前）で呼ぶ
のを許さない。好物。菜味入りスープ、牛肉、豆、ウナギ。ワインを好んで呑む。
何かを見るのが好き。喜劇を好む。自分自身についてより、他人の事を深く考え
る。

この観察録から、ある一定の女性像（少女像）を描き出すのは容易
ではない。矛盾背反するような点が目立つからである。そこで人や事
物に対する彼女の好悪だけに限定して、比較検討してみよう。好物で
は、スープ、牛肉、豆、ウナギ、ワイン、タバコ。また子供好き、子

供の遊び、読書好き。何かを見たり聞いたりするのが好きで、特に喜劇が好き。嫌いなのは、椰揄と陰口。怖いのは、蜘蛛、鼠、幽霊、結婚。こうした好悪から人は一体何を想像するだろうか。筆者の印象では、これはまさに子供そのもの、少女そのものではないか。しかしそんなじよそこらの子供や普通の少女ではない。一風変わった子供、何かユニークな少女である。陽気で、我儘で、気まぐれで、お茶目で、一本気で、利かん気で、少し内気で、やんちゃで、おませな女の子というイメージである。また好奇心が強く、誰にも好かれたいという八方美人的な面もある。十三、四歳で喫煙をし、ワインを飲むというのはいささか奇異な感じがするが、彼女の家庭では許されていたのである。いずれにしろ、好き嫌いのはっきりした性格の金髪で白哲の美少女である。何やら西洋人形を彷彿させないでもない。この少女が十三歳の時に、ノヴァーリスと婚約した。当時は今より全般に人間の寿命が短く、逆に精神年齢が今をはるかに凌駕していたのか、結婚年齢も早かったらしい。婚約中にはただ楽しいことばかりではなく、嫉妬や猜疑心で互いに傷つけ合うなど様々な悶着もあったようだが、ノヴァーリスは彼女を心底から愛していた。知り合ってから二年後の一七九六年七月八日付の、友人シュレーゲル弟宛の書簡の一節に次のような文面が見られる。

僕の好きな学問は根本では僕の許嫁と同じ名前だ。彼女はゾフィー(Sophie)という。だから哲学(Philosophie)ゾフィーを愛する)は僕の人生の魂であり、僕本来の自分自身を解く鍵というわけだよ。彼女と知り合ってから以来、僕はこの学問とも合金したのだ。なんなら僕を試してみてくれたまえ。ともかく何かを創作すること、彼女と結婚すること、それが僕の諸々の願いのゴールなのだ。

友人に洒落とおのろけ混じりの告白をするノヴァーリスの顔が眼前

に彷彿する趣がある。この時期、彼は仕事、研究、創作、恋愛など全ての面で、順風満帆といった風情だった。だが好事魔多しが俗世の習い。間もなくゾフィーは重い病に倒れた。彼女の病床で彼は祈る。暗い予感が彼の脳裏をかすめる。恋人の病が彼の愛をさらに強める。彼は煩悶しつつ、快癒を祈る。希望と不吉な予感が交錯する。その内ゾフィーは家族に伴われてイエーナに移され、そこで名医の執刀で手術を受ける。病因は肺結核。手術後の経過は良好に見えた。療養中にノヴァーリスの父親が彼女を見舞いにきて、即座に彼女のとりことなり、晴れて息子との婚約を許した。またかのゲーテも彼女の病床を見舞っている。彼女は見る人を瞬時に魅了する魔力を備えていたらしい。しかしその彼女も病魔には打ち勝てなかった。二度目の手術の甲斐もなく、早春の三月十九日、彼女は実も結ばずに散り急ぐ花のように凋落した。それは十五歳の誕生日を迎えてから二日後のことだった。仕事のためか、故意にか、ノヴァーリスは彼女の病床には居合わず、その死にも立ち会わなかった。愛弟のエラスムスが兄にゾフィーの死去を伝えた。そしてその一カ月後にエラスムスも病死する。恋人と愛する弟を相次いで失ったノヴァーリスの心中は如何なるものであったか。それは彼の日記から推測するほかはない。

一七九七年五月十三日

ゾフィーの墓の前で名状しがたい歓喜を味わう。きらめくような感激の数瞬間。彼女の墓石をあたかも塵埃のように息吹で吹く。数百年の歳月も数瞬間の如し。ゾフィーが私の傍らに在るのを感じる。彼女はこれからいつでも自分の前に出現するだろうと思う。

五月十九日

ゾフィーの墓で思いついた。私の死を通じて人類に、死を賭した貞節さがある

ことを見せるのだ。そのような純粋な愛が人間には可能だということを人類に示すのだ。

五月二十日

彼女の墓でいろいろなことを考えた。いつもの胸騒ぎはなかった。だが日中同様に、今夜は再び彼女が死んだ不安、自分の孤独な立場、彼女を失った恐ろしさを痛感する。彼女がいなければ、この世は自分にとって無だ。本来私はもはや何物にも価値を置いてはいけないのだ。

五月二十二日

感覚的な痛みがしりぞくにつれ、精神的な悲しみが増し、ある種冷やかかな絶望がいよいよ高じてくる。世界はますます疎遠なものになる。周囲の物事はなお一層無関心なものになる。それに反して私の周りも私の内部も一層明るくなる。自殺の決心でただ屁理屈をこね始めてはいけない。どんな理性的な理由も、どんな心情的な見せかけも、それはすでに懷疑であり、動揺であり、不誠実なのである。

五月二十六日

ゾフィーのことをしきりに考えた。そこで特にはっきりしたのは、最高に素晴らしい学問もその他の期待も私をこの世に引き留めることにはないということだ。私の死は至高の存在（神）に対する私の気持ちの証左であり、真の犠牲であって、逃避でも非常手段でもない。

ゾフィーの死語八十日目の六月六日にもこう記す。

苦痛を逃れる者は、もはや愛する気持ちがないのだ。愛する者は永遠に心に空隙を感じて、心の傷口をいつも開いておかなければならない。神よ、絶えず私に

この名状しがたい愛の苦しみ、悲しい思い出、心の憧れ、雄々しい決意、さらに揺るぎない信仰を保持させてください。ゾフィー無くしては、私は無の存在だ。全ては彼女とともにある。

度々死者の墓を訪ねてはゾフィーの霊と語り合い、死後の世界を確信したノヴァーリスは、あの世で彼女と再会するために、後追い自殺をしようと決意する。だがいざとなると、なかなか実行に移せない。そして決断の手前で遅疑逡巡する心の内面を、彼は克明に日記に書き込む。ゾフィー及びこの自己との対話が彼を立ち直らせる契機となったのであろう。かくて彼は試練の日々を耐え抜いた。全てに時ありというが、彼の地上の時はまだ終わっていないかった。彼の創作の新たな境地はここから開始する。

さて一七九九年一月二十日に、ノヴァーリスはシュレーゲル弟に新たな希望について報告している。

君に話したいことが一杯ある。この地上は僕をまだ長らく引き留めておく積りらしい。君に話した例の事はいよいよ親密で、魅力的なものになってきた。これまで経験したことがないほど、僕は愛されている。とても愛らしい女性の運命が僕の決意にかかっている。僕自身の喜び、それに両親と兄弟姉妹たちが僕を以前よりも必要としている。非常に興味深い生活を僕を待ち受けているようだ。そこで僕は本当に死んでもいいくらいだ。僕は事態を見守っている。僕が居なくてもよく、さらにいろいろな障害が出て来たら、その時は、最初からの計画を実行に移す合図なのだ。その場合は、カールかカルロウィッツ（いずれもノヴァーリスの弟）が、僕の跡を継ぐように願う。もし僕が健康でいられたら、幸せで素晴らしい日々を過ごすことになるだろう。ユーリエは半年間ひどい苦痛に悩まされた。最悪の事態を想定したくらいだ。ところが最悪と思つた時期に、突然に病気が収まり、クリスマススイブ以来、彼女は健康を回復し、気分も朗らかになった。

この二カ月というものは僕はほとんど何も手がつかなかった。不意の発病の外、不安、気晴らし、仕事、旅行、再び戻ってきた喜びと愛。それらのために僕は執筆からすっかり遠ざかってしまった。

文中に登場するユーリエという女性は、ノヴァーリスがフライベルク鉱山大学に在籍時に教官だったシャルペンチエ統監の末娘で、当時二十二歳だった。彼女と彼はこの手紙を出す一カ月前に婚約したばかりだった。この女性がどんな人柄だったかは、ノヴァーリスの書簡から窺うことができる。

あなたはユーリエ・シャルペンチエ嬢を直接ご存じだから、この愛すべき女性の柔和で謙虚な人柄がすぐに僕の心を引き付け、彼女に対する尊敬の念を僕に抱かせたのには驚かないでしょう。無論彼女がやがて僕には無くてはならない存在となり、婚約することになるとは予想もありませんでした。彼女のお父さんが病気になるたびに、彼女の心の輝かしい面が明らかになりました。優しい心遣いと幾夜にもわたる看病のために、彼女は健康を損ね、昨年の夏には酷い顔面痛に襲われました。ゾフィーの教育係だったある年配の婦人が最近亡くなってから、私も病気になる、テープリッツに療養に出掛けねばなりませんでした。そこから帰ってきたら、彼女がこんな痛ましい状態にあったのです。ここにいたって初めて、彼女に私の人生を捧げようという考えがはつきりとなったのです。愛する伴侶がいなければ、この人生も世事への関与も私には重荷でしかないと分かりました。ユーリエの状況がすっかり明らかになると、これ以上に貞節で信頼できる優しい妻は決して見つからないだろうと思ひ、勤勉を促進するような制約された状態が望ましく思われ、しかもそうした中で私が気楽に耐えていけるように援助の手を差し伸べてくれるのは、彼女をおいてないと感じたのです。また彼女のためには如何なる犠牲も私は厭いませんし、私のこの決意によって彼女の将来の不愉快なことを省いてやれるだろうと確信したのです。

このユーリエなる女性は、容姿はきわめつきの美人というほどではなかったが、見るからに愛らしく、美しく、ややもの悲しい表情をしていた。その性格としては、氣立てが優しく、柔和で、静かで、謙虚で、献身的で、忍耐強かった。ゾフィーとはほぼ逆のタイプだったように見える。恐らく成熟した家庭的な女性だったのである。かくして今度こそノヴァーリスの長年の宿願が叶うかに思われたが、その憧れが実現する瀬戸際で、惜しくも彼の命数が尽きた。ゾフィーと同じく肺結核だった。皮肉だが、エーロスの天使は最後に彼を見捨てたのである。あはれ、儂き人の希望よ。

(三) カーオス

ノヴァーリスはほっそりとして背が高く、高貴な風貌をしていた。髪の毛は淡褐色で長く、先端が巻き毛になって垂れていた。それは今では珍しいだろうが、当時は余り目立たなかった。褐色の眼は明るく輝いていて、その顔色、とりわけ才気あふれる額は透き通るように白かった。手と足はやや大き過ぎて、全体とのバランスに欠ける憾みがあった。その顔付きはいつも朗らかで、善意に充ちていた。外見の押し出しやうわべだけの作法や流行への適応具合で人間を判断する人には、ノヴァーリスは目立つ存在ではなかった。しかし目の肥えた人には、彼は美男子に見えた。彼の顔の輪郭や表情は、ニルンベルクとミュンヘンの美術館所蔵のアルブレヒト・デューラーの作品、あの大作の素晴らしい絵に描かれた福音家聖ヨハネの肖像によく似ていた。

これは親友ルートヴィヒ・ティークの見たノヴァーリスの容貌であるが、その性格についてはかつての上司が次のように書いている。

親身な誠実さが性格の主要な部分だった。それは彼の全人格の中に深く織り込まれていて、それを抜きにしては、彼の人物は決して理解しえないだろう。

次はある女性の目から見たノヴァーリス。

ハルデンベルク（ノヴァーリス）が数日当地に滞在しています。あなたは彼をじかに自分の目でご覧にならなければなりません。彼について本を何十冊読んで、一緒にお茶を飲んだ場合ほどは彼をよく理解できないでしょう。私はただ純粹に観察したままを話しているだけで、彼と会話を交わすまではいたっていない。彼のほうがそれを避けているようなのです。

もう一人別の女性のノヴァーリス観。

ハルデンベルクに会いました。そのことから真つ先に始めます。何故なら、それ以上に私の興味をひくものは他にないのですから。彼の姿かたち、美しく輝く眼、あらゆる立居振舞に現れる魅力的な親切さには、本当にうっとりさせられます。ですから、私はまたも私の心に突き刺って折れたキュービッドの矢を抱えたままでいなければならないのよ。だって彼にぞっこん参ってしまったのは、私の方ですもの。

これらを読んだだけでも、ノヴァーリスは、外見も人柄もまことに魅力的な人物だったらしい。しかし彼に反発をおぼえる人々も当然いた。例えば、哲学者のシェリングは手厳しくこう批判する。

様々な対象に対するこの（ノヴァーリスの）浅薄さは、僕には我慢できない。ありとあらゆる事柄に頭を突っ込むけれど、そのどの一つにも深く透徹していない。

同じロマン派仲間の言辭としては痛烈だが、当たらずとも遠からずの批判でもある。ノヴァーリスの断想集を読めば、その余りに多岐亡羊の觀念に辟易させられないではない。それだけ彼の関心の対象が広く膨大だったということであるが、反面でまた皮相的あるいは抽象的過ぎる憾みもある。そのことをシェリングは指摘したのであろう。しかしその批判には個人的な嫌悪感に発する陰險さも感じられる。

概して人間は誰しもその内部に矛盾し相反するものを抱えているものである。それを自らはつきりと自覚している人もいれば、逆に全く自覚していない人もある。人さまざまだが、ノヴァーリスは彼自身の中の二重性あるいは背反性を自覚し、それをつぶさに凝視して、自己の中にあらゆる矛盾や撞着が錯綜して存在すること、そればかりか一個の人格の中に数個の人格さえ共存しうることをさえ知悉していた。例えば彼の場合端的には、自己保存の欲求と自己破壊の願望、生者への愛と死者への憧れ、執拗な利己心と寛大な利他心が同居している。それをさらに細かに観察すれば、官能と知性、野生と洗練、冷淡と熱血、平静と感激、放心と集中、脆弱と強壯、臆病と大胆、不満と充足、虚栄と自尊、夢想と思弁、傲慢と畏敬、不信と敬虔、尊大と謙虚、放逸と苦行、享楽と殉教、通俗と神秘などである。その他にも矛盾背反を捜せば、いくらでも見つかるだろう。通常の悟性で判断すれば、こうした矛盾撞着を多く抱える人間は不可解な二重（或いは多重）人格者として糾弾されるかもしれない。だがそれは軽率な判断である。うわべだけを見ていては、内部の深さを見逃してしまふ。表面的な見方は対象を矮小化する。先ずものごとを深く見る訓練をしなければならぬ。ものごとを深く見る人は背反の中に合一を見る。矛盾の中に統一を看取する。表面の下に隠れているものを発見し、その意味を探る。自己の内部を掘り下げれば、深みは次々と開示され、その下方に無限の深淵が広がる。マクロとミクロの世界に限界がないのと同じである。

ノヴァーリスはその深淵を覗いたのである。彼の凄いとくろは魂の深所を見ただけでなく、さらに逆に精神の高所、神性の天空へも上昇したことである。自然の研究と精神の研究を同時に遂行したのも、彼の内部の二重性の反映である。彼は自然界にも精神界にも無限のカーオスの存在を認識し、その中を旅しながら、神の偉大な秩序をも感知したのである。そのことを実感したければ、先ずなにより彼の作品を読まなければならない。紙幅の制約上、以下では彼の代表作『ハインリヒ・フォン・オプターディングン』のみを取り上げ、その神秘性を考察する。

この小説を筋書きで追えば、極めて単純である。主人公はハインリヒ・フォン・オプターディングン、当年二十歳。彼は一応修学を終えたが、生まれ故郷を一步も出たことがなく、実地の見聞がまるでない。そこである日、彼は母親に伴われ、同郷の商人達に同行して故郷のアイゼナハを出発し、母方の祖父の居住地である古都アウクスブルクへと旅立つ。その道中に一行は様々な出会いを体験する。ある騎士の館では、数奇な運命の東洋の女性に出会い、その歌う哀歌と物語に感動し同情する。また旅の一行はある丘陵のふもと村で、かつて山師だった老人に出会い、自然と鉱物の蘊蓄に耳を傾ける。さらにその老人の案内で岩山の洞窟の中に入り、その奥に独り暮らしする隠遁者と語り合い、そこで偶然目にした書物の中に、ハインリヒは自分の運命を見る。旅の終わりはアウクスブルクの祖父宅での祝宴。その宴でハインリヒは詩人のクリングゾールとその娘マチルデと出会い、二人に詩の師匠と永遠の恋人を見いだす。永遠の愛と貞節の誓いの後に、ハインリヒとマチルデは婚約し、そのお祝いの言葉としてクリングゾールが長いメールヘンを物語って、小説の第一部が完結する。

人生は旅である。とりわけ青春の旅は自己生成の旅である。ハインリヒも旅の中で、夢想的な若者から詩人へと成長するのである。それ

には多くの見聞や体験が欠かせない。同行の商人達が旅の途中に、古代ギリシアの吟遊詩人アリオンの旅行譚や彼と海の動物の交感、伝説の大陸アトランティスの王女と恋に落ちて、紆余曲折の後について王女の婿として王座に上る若き詩人の話を詩を交えながら物語る。騎士達の館での夜宴では、騎士達の語る十字軍の遠征や、そこから連れて来られたとおぼしき東洋の乙女との会話の中で、ハインリヒは中世の世界の光と陰を垣間見る。山村の夕べでは、山師の老人によって鉱物探索と自然理解の奥義を伝授され、隠遁者ホーエンツォレルン伯爵からは輪廻する歴史と人間の運命の秘密を開示される。諸国を遍歴して詩心を錬磨した師匠クリングゾールによって詩とメールヘンの世界に開眼する。そして永遠の恋人、青い花、マチルデ。この出会いによってハインリヒの憧れが現実となり、青い花がマチルデに変容する。二人の魂が出会い、一つの愛に融合する。マチルデはかつてはアトランティスの王女であり、また東洋の乙女でもあった。それが輪廻を繰り返し、今やマチルデに入魂し、花咲き匂う乙女として復活したのである。抱擁しながら二人が交わす会話は、地上の言葉ではない。地上では地上の言語を使用するしか方法がないので、かりそめにそれを使っているだけで、その中に込められた天上の魂の響きを聞き取らねばならない。

「愛とは僕達の内の最も内密なもの、その固有の隠れた存在が秘密裏に合流し、一つに溶け合うことなのだよ」

「ハインリヒ、こんなに愛し合える二人は、これまでにいなかったでしょうね」
「ああ、マチルデ。もう一度僕に誓ってごらん、君が永遠に僕のものだと。愛は限らない繰り返しのだからね」

「ええ、ハインリヒ。私は永遠にあなたのものよ。目には見えないけれど、今は亡き優しいお母様の面前で誓いますわ」

「僕も永遠に君のものだよ、マチルデ。僕達のそばに臨在される神様に、二人の愛は本当に永遠なのだと言おうよ」

さてこの小説の冒頭に、精神分析学の恰好の対象となりそうな夢が出てくる。主人公ハインリヒの見る夢。詩人になるべき定めめの若者が、夢の中で自分の誕生の瞬間と未来の運命に出会う。昼なお暗い鬱蒼たる森の中を独り歩いて、山峡の谷を行き、苔むした石ころの河床をよじ登り、山腹の小さな緑地に出る。緑地の後方に切り立つ岩壁。そこに洞穴の入口がある。そこから中に入り、洞窟の中の細道をたどると、清らかな水を湛えた池泉に出る。その中で水浴した後、光り輝く清流を泳いでいるうちに、ふと気づくと、ある泉のほとりの柔らかな芝生の上にいる。泉からきらめく水が空高く噴出し、その飛沫は空中に消滅する。泉の周辺にあらゆる色彩の花々が無数に咲き乱れている。その中に限りなく美しい丈高い一本の花がある。これぞ憶れていた青い花。その花の芯の所に、清楚で美しい乙女の顔。それを見つめたハインリヒは花の精に魅了されて陶然となり、無限の幸福を感じる。だがまさしくその時、彼は母親に起こされて目が覚める。この夢はドイツ語の原文で読むと、読み手も一緒に夢を体験しているような不思議な気分になり、その陶然たる余韻が嬾々として残る。しかしこれをフロイト流に分析すれば、確かにエロティックな性描写に比定されるかもしれない。だがそれは強引な解釈で、偏った不純な見方である。夢を見るハインリヒはあくまで純潔である。彼は夢中に魂の故郷を捜し求めたのである。遙かな自己探索の旅。その旅の果てに咲く一本の青い花。それは単なる幻想ではない。現実の反映なのだ。ハインリヒの人生遍歴は言わば、その憧憬の花を捜し求めて見つけ、それを現世で見失い、来世で再発見する旅にはかならない。すなわちこれは魂の輪廻の物語である。

この小説は二部仕立てで、第一部が『期待』、第二部が『実現』であるが、第一部終章のクリングゾールの物語るメールヘンが、第二部への橋渡しの役割を帯びている。しかるにこのメールヘンが頗る難解である。日常的な悟性で論理的に解明しようとしても失敗する。精神分析の手法では限界がある。何故か。ノヴァーリス自身こう語る。

メールヘンは夢の映像のように脈絡がない。しかも摩訶不思議な物事や奇跡的な出来事が調和的に統一されている。音楽的なファンタジー、堅琴の妙なる調べ、自然そのものである。

愛の時の到来、地上の苦難からの解放として、メールヘンは極めて重要な役割を担っている。正体不明の女性ゾフィーが神聖な巫女として、このメールヘンの登場人物全員心を司っている。詩の妖精ファールはその精力的な活動と詩心の発露によって、世界を救済する役目になっていく。ファールの敵対者が宮廷書記であり、彼は様々な手練手管を弄して悪事を企て、ファールの活動の邪魔をする。この書記は地上の原理に支配され、自己の利益のために孜々として励む学問の象徴であろうか。また他方で暗い洞窟の中でぼんやりと坐り、機械的に運命の糸を紡ぐ母親達がいる。ファールと共同して世界救済に一臂を仮すが、愛の剽軽者エロスと月のまな娘ギニスタンである。やがて地上の太陽が姿を消し、世界の火炎がアルクツールとその娘を閉じ込めていた酷寒の水を溶解する。このメールヘンの舞台は広大な宇宙。ファールとギニスタンとエロスの活躍で、やがて戦いは終わり、平和が再び戻る。民衆の歓呼の中で新しい王エロスと新しい王妃フライヤが王座に上り、互いに抱擁すると、民衆もそれを見習って互いに抱擁する。最後にファールが糸を紡ぎながら、高らかに歌う。

ここに永遠の国が築かれ、

愛と平和の中に戦いは終わりを告げ、

苦しみの長き夢は過ぎ去り、

今こそソフィーは永遠に人々の心の畜女なれ。

第一部でハインリヒは様々な見聞や体験を重ねて、その生まれがらの使命を実現して詩人となる。第二部では現実が詩となる過程が描かれる予定だったが、ノヴァーリスの病死によって冒頭の第一章『アストラーリス』だけで中断し、残りは草案に終わった。この章は幸福な結婚後マチルデが病死して、愛する新妻に先立たれたハインリヒが悲しみの巡礼の旅に出たところから始まる。かくして地上的な時間と空間を超越した世界を主人公は彷徨する。途中である修道院に立ち寄るが、そこは死者の国であり、修道士達も死者ばかりで、そこで彼は死と生の逆転を知る。そこからさらに古代ギリシア、イタリア、中近東と舞台が移り変わり、最後にハインリヒはマチルデに再会することになった。ところがこの小説全体は詩の賛美であり、魂の輪廻の物語であるが、作品中いたるところにノヴァーリスの神秘的な世界観が鏤められている。例えば第二部で主人公がさらりと云ってのける言葉がある。

運命と心情とは同一のものの異なった名称(別名)なのです。

これはともすれば見過ごされがちな表現だが、実は恐るべき深い洞察である。我々の人生は恰も外面的な現実と左右されているかに見えるが、実はそれは我々の内面の反映なのだ、と喝破する。そしてハインリヒと対話を交わす老医シルヴェスターも美しい植物観を披瀝する。

植物は大地が直接的に開示する言葉なのです。どの新しい葉も、どの特殊な花も、やむにやまれず自己を顯示する何か秘密の存在なのです。愛と法悦ゆえに身動きできず言葉も発せられずにいる秘密、それが即ち静かに沈黙する植物となるのです。

この小説の措辞や文体は一種独特である。それは言葉のリズムやメロデーの作用というよりも、むしろ様々な音色の錯綜協和するハーモニーの効果に近い。この小説全体で使用される語彙数は四千二百余語に過ぎないのに、その文章が紡ぎ出す雰囲気は驚くほど神秘的である。文体は一樣に素朴で奇異を銜う意図は少しも感じられない。例えば、商人が詩人のように物語り、高貴な伯爵が民衆のような話し方をする。そうかと思えば、詩人のクリングゾールが商人と変わらぬ言葉遣いをする。これらはノヴァーリスの意図的な配慮であって、創作上の工夫が足りないのではない。商人や山師も伯爵も詩人も身分の差など意に介しない。時代背景は篤い信仰と純朴な魂の支配する中世である。身分の差を越えて、人々は心の内面より発する言葉、魂の言葉を語るのである。そこに差別や優劣がないのは当然であろう。とはいえ、ノヴァーリスが好んで多用する言葉が散見するのも事実である。

例えば、Traum(夢)、Sehnsucht(憧れ)、romantisch(ロマンティック)、fern(遠く)、blau(青い)、Himmel(天国、天上、空)などがそうである。それらが文章に織り込まれて詩人の意匠から紡ぎ出される時に、その醸し出す雰囲気は独特のものが漂うのは文体の力であろう。次のハインリヒの意見はノヴァーリス自身のものと見て差し支えない。

本当に言葉は、記号と音との織り成す小世界である。人がそれを自分のものにする、大世界を掌握したくなり、そこで自己を自由に表現できるようになりた

いと願う。世界の外にあるものを言葉に表し、我々の存在の本源的な衝動を表出しえる喜びの中にこそ、ポエジーの根源がある。

上で既に触れたが、この小説の時代背景は中世ヨーロッパと中近東である。古き良き時代の面影が静謐で幽玄な筆致で描出される。この古き時代は歴史的事実ではなくて、時を越えて存在する。時間が歴史の制約を超えて、永遠に移行する。黄金時代の反復回帰。そこでは自然と現実が詩へ変貌し、憧れと永遠の愛に昇華する。自然はそれ自身一大活物であり、生成し、変転し、進化する存在である。しかしその自然も人間の一部分であって、その逆ではない。人間の内部の良心の力が自然を教化して、理性的、道徳的存在に変身させるのである。自然の魔力をたわめ、馴致させるのが詩人の使命でもある。これがノヴァーリスの自然観の核心をなす。しかしこうした神秘的な観念は今日の自然科学者の理解がたいところであろう。魔術的観念論と呼ばれる所以である。だが幾ら奇異で突飛な観念に見えようと、そこには比類なき真実が潜在している。今日人間が自然を破壊し、地球を汚染しているのは、ノヴァーリスの信念の邪悪な裏返しに過ぎない。

さてここで、この小説の成立史にささか言及しておこう。一七九九年の晩秋から初冬にかけて、静かな環境の中でノヴァーリスは全精力を集中して、この小説の第一部を書いた。一八〇〇年四月に、友人のシュレーゲル弟に第一部の完成を報告している。この小説を書く動機には一つの背景がある。それはゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』である。フランス革命、フィヒテの哲学とともに時代の三大趨勢の一つに数えられたマイスターは、当時の青年から熱烈に迎えられる。ノヴァーリスもこれを早速読み、魅了された。しかしそれを繰り返し精読するうちに、ノヴァーリスの中に劇的な転換が生じた。マイスターの熱烈な賛美者から痛烈な批判者に転じたのである。限り

なく優雅な自伝的教養小説が、若きロマン主義者の目に、忌まわしく馬鹿げた本、不遜で、気取った、貴族的な小説に転落した。先ずなによりポエジーの欠落が彼には致命的に思われた。現実の生活を洗練された華麗な文章で描写したままで、そこには崇高な美の理想も、深遠な詩の精神も欠如していた。少なくともノヴァーリスはそう感じた。この上品な通俗的散文小説に対抗するためには、彼自ら美の理想と詩の魂を体現した作品を書かねばならぬと決意した。そこに『オプターディンゲン』の構想が芽生えた。詩が無限へ昇華し、無限が現実に凝縮する、そうした限りなくロマンティックな詩的小説を目標に、ノヴァーリスは自己の全存在をかけて、あらゆる音の快く共鳴する一大交響曲を創作しようと試みた。そしてそれは成功した。かくて愛と魂の輪廻、日常の時間と空間を超越した神秘小説がここに誕生したのである。この小説は作者の死によって残念ながら未完に終わったが、これがロマン派を代表する最高傑作であることに変わりはない。

さてここで閑話休題として、まとめに移る。

一七九九年の晩秋、聖マルティン祭(十一月十一日)の頃、大学町イエーナでロマン派の人々が一堂に会して、その威勢を誇示した。メンバーは機関誌『アテネウム』を主宰するシュレーゲル兄弟とその伴侶たるカロリーネとドロテア、ティーク夫妻、シェリング、リッター、そしてノヴァーリスであった。もしここにシュライアマッハーとヘルダリン(彼らの仲間ではないが)が加わっていたら、ドイツ初期ロマン主義者がほぼ全員勢揃いしたわけだが、前者はベルリン、後者は遠いフランスにいた。一行はそれから数日間イエーナに滞在し、食事や歓談や散歩をともにしながら互いに友好を深めた。ある日彼らが町の郊外を一緒に語り合いながら散策中に、彼らが唯一崇拜する神々しきアポロ、ゲーテに遭遇した。当時五十路のゲーテが愛想よく彼らに挨拶をしてくれた時、今を時めくこの若き文壇の獅子達はどれほど

狂喜したことだろう。まさにこの時点が彼らの絶頂期、ロマン派の最盛期であった。この時期を境に彼らは各自の道を歩み始めて分散し、ロマン主義の満開の花が散り始めたのである。その時はまだ彼ら自身も、会話が別れの初めとは予感していなかったであろう。先ず二人の守護女神、同じ年のカロリーネとドロテアの反目から始まった亀裂が、その夫達のシュレーゲル兄弟やその仲間達をも巻き込み、ついにはロマン派の美しい同盟を互解させるにいたった。これぞロマンティック・イロニーの皮肉な結果であろうか。だがしかしノヴァーリスはこの仲間内の不和葛藤には何ら関与も介入もしなかった。俗悪な喧嘩や離反に加担するには、彼の人格は余りに高潔であったし、またこの地上での彼の余命もあと僅かしか残されていなかった。

世紀が転換する一八〇〇年の夏に、結核菌に蝕まれたノヴァーリスの体が、著しい衰弱の様相を見せ始めた。咳と咯血が目立つようになつたにも拘わらず、仕事と旅行、研究と創作を続け、時に体の鍛錬と称して長時間の馬の騎乗も敢行した。それがますます肉体の消耗を進行させた。そうして翌年の早春には、ノヴァーリスの二人の主治医も回復は絶望的と見なした。三月二十三日、病床を見舞いに、友人のフリードリヒ・シュレーゲルがノヴァーリスの家を訪問した。彼は友人の来訪を心から喜んだ。病床のノヴァーリスはにこやかな顔で上機嫌だった。しかし見るからに体の疲労と衰弱は甚だしかった。シュレーゲルは万一を思い、滞在を延期して泊り込んだ。その二日後の三月二十五日正午十二時半、友人と家族の見守る中、ノヴァーリスは弟の弾くピアノのメロディーに耳を傾けながら、穏やかに眠るように瞑目した。享年二十八歳十カ月だった。親友の死を見取ったシュレーゲルが臨終の様子を次のように記している。

彼は自分の死をまるで予感していなかったに違いない。人がこんなに安らかに、

こんなに美しく死んでゆけるとは誰も信じられないだろう。私が見守っている間、彼は言葉で言い表せないほど晴れ晴れとした表情をしていた。最後の日は、極度の衰弱のために自分で話すことも難しかったが、明るい表情で周囲のことに耳を傾けていた。彼の最後をこうして見取ることができたのは私には本当によいことだった。

ノヴァーリスの死去とともに、文字通り初期ロマン派は終焉を迎えた。そしてそれはまた新たな混沌の時代の幕開けでもあった。その混沌の朦朧たる闇をつらぬく青い閃光こそ、ノヴァーリスの高貴な魂の輝きだったのである。彼の思想は我々を魂の生活に導き、我々の精神を遙か天空へと飛翔させる。では再び問おう、ノヴァーリスとは一体何者であったのか、と。人智学者ルードルフ・シュタイナーはかく断言する。

ノヴァーリスは聖ヨハネの再来であり、彼は新たなキリストの到来を予告する。

(註) 底本は次のものを使用した。引用は全て筆者の訳出である。

Novalis Schriften Historisch-kritische Ausgabe in vier Bänden.
Verlag W. Kohlhammer Stuttgart 1960-1975.

Lichtstrahl der Romantik

Hiromi TSUTSUMI

Novalis ist der Polarstern der deutschen Romantik. Er wurde in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts geboren und wuchs in einem unruhigen Zeitalter auf. Als er erwachsen war, befaßte er sich emsig mit der Schriftstellerei, während er als Beamter die beruflichen salinischen Arbeiten leistete. Und zu Beginn des 19. Jahrhunderts beendete er sein kurzes Leben auf Erden. Bei seinen Lebzeiten war er im allgemeinen kaum bekannt gewesen, wurde aber nach dem Tod unter den Leuten allmählich anerkannt und erstand als Dichter der blauen Blume wieder. Jetzt ist er als Genie der Frühromantik in die Geschichte der Weltliteratur eingegangen. Seine Werke sind heute bis auf einige wenige Dokumente als sämtlich publiziert. Aber bei uns findet man nur wenig davon in japanischer Übersetzung. Weil er sich nicht für die Masse zu eignen scheint, würde er auch in Zukunft immer nur von wenigen gelesen. In der Tat ist diese Tendenz zwar sehr zu bedauern, aber das läßt sich nicht ändern. Bei einem Aufenthalt in Deutschland habe ich seine Werke zufällig gelesen, wobei ich sie unglaublich schön und wundersam gefunden habe. Seither nehme ich ihn manchmal zur Hand, aber kann bislang sein ganzes Bild leider nicht ins Auge fassen. Von welchem Geist und von welcher Seele war Novalis überhaupt? In dieser Hinsicht habe ich mir einige Gedanken gemacht. Meine vorliegende Arbeit legt es also darauf an, aus seinen Werken und auch anderen Materialien heraus sein ganzes Wesen näher und genauer zu betrachten.